

校歌

宮原 友子（高19回）



6月の第4週の土日に大学時代の友人14人と「還暦祝伊勢神宮参り」をした。久しぶりに乙女に戻り、60歳の修学旅行を楽しんできた。

20年程前から、総勢80数名の学科仲間の中で、世話役を引き受けてくれる人の住む地方での会があり、東京の会とは違った楽しみがある。

日本女子大に入学したばかりの頃は「良妻賢母」などと、今までの生活環境の中では聞かなかった言葉をオリエンテーションで言われ、受かったのはそこだけなのに、高田高校時代とのあまりの違いに選択を誤ったと思ったりしたものである。

どこを見ても女ばかりの生活も、慣れてしまえばそれなりの楽しさもあり、卒業後の子育ての時期は、情報交換やベビー服のお下がりのやりとりなど、女子大ならではの交流もあり、今となっては仲間と会う度、これで良かったのだと思う。

6年ほど前の旅行は、鳴子温泉に住む友人が幹事の、東北6県3泊4日の旅であった。中日をメインとし、前半、中日、後半とメンバーも入れ替わり立ち替り、参加者は総勢20数名。私も含め5名が全行程に参加し、その中に卒論を一緒に書いた友人がいた。

当時50歳も半ばを過ぎ花屋で働いていた

私は、傍から見るよりずっと重労働の苗箱や土運びの仕事の限界について話すと、「18歳のときに社会福祉の勉強をしようと思ったんだから、人生の最後の仕事は社会福祉に戻ってきたら？」と、長年デイサービスを運営してきた彼女は言った。そのときはあまりその言葉を重く受けとめてはいなかったが、しばらくして、多角経営をしていた花屋の経営者が採算の合わない花屋部門を閉じることにし、私は職を失った。

失業保険受給中、彼女の言葉を思い出し、ヘルパー2級の資格を取り、介護の仕事に就き、今に至る。あの時の彼女の言葉がなかったら、現在の私はなかったと思う。

早いものであれから丸4年経った。今年やっと職歴3年の受験資格をクリアし、介護福祉士試験に合格した。まさしく60の手習いである。

人生60年も生きて来るといろいろな出会いがある。世間は意外と狭く、人はどこかでつながっているものだ、と感じる機会も多くなってきた。

介護の仕事に就いてからも、入居者の方と共通の人物を知っていたり、職場の仲間が知人の友人であったりと、益々その感を強めている。今の職場に転勤になる前に勤めていた横須賀の施設でお会いしたK氏も、そんな思いを強くした方の一人である。

新潟県出身と聞いていたが、ある日ゆっくりお話できる機会があり、お聞きすると、出身は中頸城郡、高田中学校を卒業され、なんと私の母の従兄弟の家もご存知だった。私が校歌を歌うと「♪妙高山は～」と唱和

された。それからはリクエストされて歌う度に一番と一緒に歌われ、私が最後まで歌い終わると「あんた上手だね」と褒めて下さった。ご自身は歌はあまりお好きではなく、レクリエーションの歌の会には参加されなかったが、校歌を歌う時ははつきり、大きな声で歌われた。昨年訃報を聞き、もう一度一緒に歌いたかったと思ったものである。

最近また、大先輩達の校歌に対する思いは私達のそれよりも強いものがあると認識することがあった。大学入学時、学科での自己紹介後に「私の父も高田高校の出身。家に遊びに来て」と声をかけられて以来の友人の父上を病院に見舞った時のことである。

最近が発語もなくなり、問いかけに対し

てうなずかれるだけになってきていたが、私が校歌を歌うと、リズムを取るような様子がみられた。彼女は「いつもと様子が違う。校歌を是非手に入れたい」と言う。毎年の同期会で流されている校歌を思い出し、同期会幹事の小坂君に事情を話すと、快くテープを作成してくれた。そのテープを持ち、彼女と病院へ行き、校歌を流した途端、「オオッ」と声が聞こえた。目を輝かせ、頬を紅潮させた父上の姿があった。「校歌ってすごいわね」と彼女が言い、私は胸が一杯になった。小坂君に感謝である。

在学中は何とも前時代的な歌詞になじめなかったが、実家が引っ越してしまい、直江津に帰ることもなくなった私にとって、校歌と一緒に歌った人との思い出と故郷の情景につながるものとなっている。

